

ワールドぶらり 1 「岐阜」  
自転車であぐる・みんなで考える  
―長良川河畔のエリアケイパビリテイ―

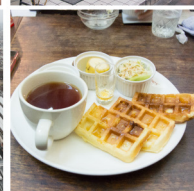
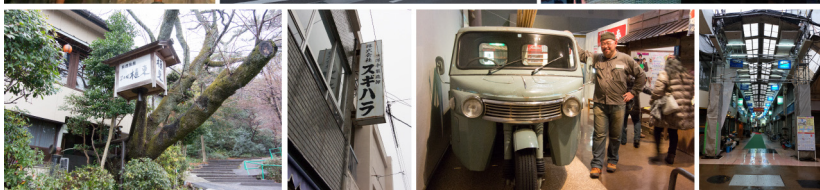




フィールドぶらり 1 「岐阜」

## 自転車でめぐる・みんなで考える

—長良川河畔のエリアケイパビリティー—



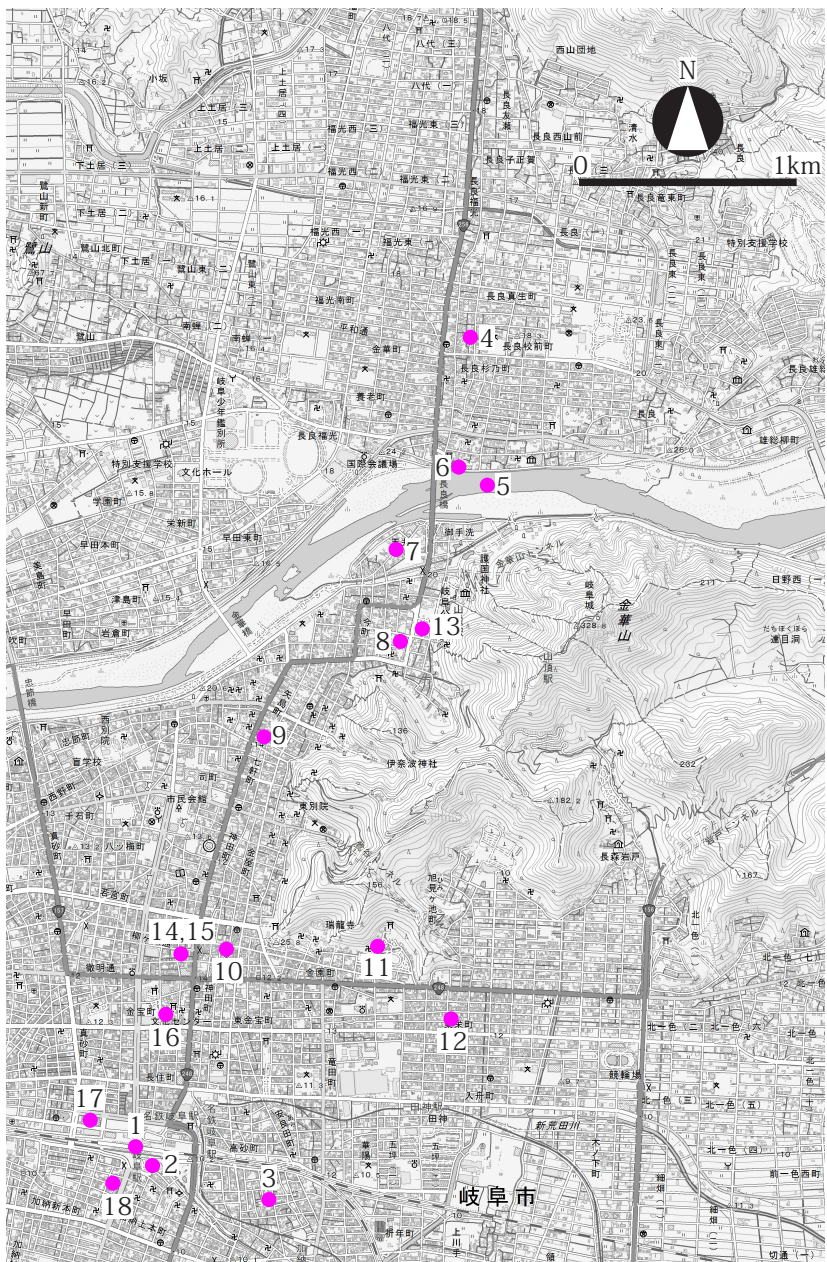
1	3	4
2		
5	6	7
8	9	10
11	12	13
14		
15	16	
17	18	

#### 2015年1月14日 (水)

1. 岐阜駅
2. レンタルサイクルポート (JR 岐阜駅)
3. とんかつの松屋
4. たまりや 山川醸造株式会社
5. 長良川 金華山
6. 鶴船の足湯 長良川観光ホテル石金
7. 川原町の町並み
8. 岐阜正法寺大仏殿
9. 山本佐太郎商店
10. たい焼き屋 福丸
11. 翠々園 植東

#### 2015年1月15日 (木)

12. 株式会社スギハラ
13. 岐阜市歴史博物館
14. 岐阜市柳ヶ瀬商店街
15. ツバメヤ
16. 椿
17. 岐阜シティ・タワー 43
18. カフェド グウデ







## 目次

はじめに..... 1

1. 岐阜市美殿町の地域資源を考える..... 3

「この赤いカーペットは何ですか？」  
地域資源としての水、リスクとしての水  
地域社会のつながり  
重層化するコミュニティ

2. 岐阜市美殿町でエリアケイパビリティーを考える..... 19

なぜ「エリア」なのか  
エリアの定義と対象設定の困難さ  
「地元愛」は駆動エンジンか  
クオリティオブライフ（QOL）を高めること

3. 学際的に萌芽研究を探る..... 38

地域資源化するときの研究者の役割  
研究の萌芽を探る  
エリアケイパビリティーアプローチ

あとがき「地球研のためになることをしなさい。」..... 51

## はじめに

本書は、総合地球環境学研究所（地球研）に所属する若手研究員が現地視察を通して座談会を行った記録である。平成25年度より研究員の有志を募って、「若手研究員連携プロジェクト」を開始し、岐阜市美殿町フィールド合宿をもとに成果としてまとめた。このプロジェクトは、地球研に所属するさまざまな専門分野の研究員が共同で研究課題を設定して、分野を横断する萌芽研究の発掘を目的としている。

わたしたちは、「地域資源」と「エリアケイパビリティ」という2つのキーワードを共通認識としてフィールド合宿を行う前に設定した。地域資源とは、土地や気象、景観など他の場所へ移転させることができない、その地域だけに存在し、その地域だけで利用できる資源とされ、それゆえ希少性が高いものである（今村ら1995）。他方、エリアケイパビリティとは、住民と自然の関係性を向上させる地域のポテンシャルと定義されている（Ishikawa 2009）。わたしたちは、岐阜市美殿町を通してこの2つのキーワードを用いて議論した。その結果は、本書で3つの章に整理することができた。

まず、「岐阜市美殿町の地域資源を考える」では、地域社会のつながり、その中で形成されるコミュニティを通して地域資源とは何か？について考えた。

次に、「岐阜市美殿町でエリアケイパビリティを考える」では、現在も発展段

階にある新しい概念の「エリアケイパビリティ」を用いて、岐阜市美殿町を捉えるツールとして、一方で概念を批判し、言葉の意味や意義について再構築を試みた。ここでは、エリアが示すものは何か。人間と自然の関係性をうまく循環させる駆動エンジンとは何か。地域愛や生活の質（QOL）をどのように捉えることができるのかについて考えた。

最後に、「学際的に萌芽研究を探る」では、地域社会と関わる際の研究者の役割や研究者間の共同研究のあり方について考えた。これは、現地視察や2つのキーワードを用いたことによる副次的な効果であったと言える。

フィールド合宿は、平成27年1月14日・15日の2日間で、岐阜市美殿町を中心とした約3km圏内を自転車で巡り、現地で暮らすさまざまな方々にお会いした。座談会では、その時感じたまちの印象や特色、素直な驚きからはじまる。本書をまとめるにあたって、座談会の記録は2時間あり、その記録をほぼすべて記載するようにした。その理由は、この企画自体が研究員の手探りで進められており、下手に整理して萌芽を摘んでしまいたくない思いからである。本書は、少し冗長的な内容かもしれないが、一方で、試行錯誤する研究員のライブ感を楽しんでいただければ幸いである。

#### 参考文献

- 今村奈良臣・千賀裕太郎・向井清史・佐藤常雄（1995）『地域資源の保全と創造 景観をつくるとはどういうことか』農山漁村文化協会  
Isikawa, S. (2009) Challenging Project for sustainable use of coastal fisheries resources in Southeast Asia: New concept "Area Capability".  
JSPS-NRCT Seminar 2009, Rayong, Thailand, December, 52-53.

# 1. 岐阜市美殿町の地域資源を考える

## 三村

\*1  
エリアケイパビリティーとは、住民と自然の関係を向上させることが、持続的な生態系サービスの利用と地域開発を両立させる鍵であるという仮説に基づき、良好な関係性を形成・維持し、発展させるための地域のポテンシャルである（東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティーの向上」代表 石川智士）

## 「この赤いカーペットは何ですか？」

## 關野

今回は、關野さんのフィールドというか地元にもん来て、岐阜市美殿町の視察を通して、地域資源を考え、「エリアケイパビリティー\*1」の概念に当てはめて考えることが目的でした。座談会では、そんなに知らない外から来たばかりが、長良川流域について勝手に話し合っって勝手に評価したいと思います。まず、2日間の視察を通して、よかったことや感想について話してもらいます。じゃあ、まずは、關野さんからスタートしましょうか。

\*2  
油屋 山本さん  
明治9年創業の合名会社・山本佐太郎商店の代表社員・山本慎一郎さん  
合名会社 山本佐太郎商店  
〒500-8084  
岐阜県岐阜市松原町1-7番地

\*3  
たまりや 山川 醸造株式会社  
昭和18年の創業・杉の桶で伝承的な美濃の味噌とたまり醤油を自然な気候の中で造っている  
〒502-0047  
岐阜県岐阜市長良坂町1-9

今回ご紹介した人たちはお友達ということも、もちろんですが、面白いことを始めている人たちというのが、一つのポイントでした。山本さん\*2みたいに、4代目っていうそれなりに歴史持つてやっているのだけど、新しく面白いことを始めようとしている人。たまりやさんの山川醸造さん\*3みたいに、醤油業界の中では新参者で、新参者だからこそこできるようなことをやっている人。たい焼き屋さん\*4みたいに、地域外の人なんだけど、中に入り込んで面白いことやろうとしている人。そういう人たちを紹介したというのが、今回の視察の狙いでした。今日急遽行った歴史博物館\*5は、小学校が中学校のときぐらいいしか行っていないので、あんなことをやっているとは知らなかった。こういう機会じゃないとなかなか自分1人じゃ、多分行かな

※4

たい焼き屋さん  
2007年9月から美殿町に一本焼き  
のたい焼きの店を構えた森弘明さん。  
一宮市が地元の出産外者。  
薄皮たい焼き福丸  
〒500-8082

岐阜市美殿町49

※5

岐阜歴史博物館  
金華山のふもとにある、岐阜市の歴史  
と伝統工芸を紹介する博物館。  
〒500-8003  
岐阜市大宮町2-18-1

### 三村

### 渡辺

かったから、それはすごい発見だった。あと、今日、手代木くんが柳ヶ瀬を歩いていて、「この赤いカーペットは何ですか」っていう話があつて、僕の中では、あれはごくごく商店街の中に当たり前のようにあるじゅうたんだと思っていました。僕も、そう。何でかなと思った。赤いじゅうたん。

そう、あれ不思議。写真撮りました。



岐阜市柳ヶ瀬商店街劇場通り

關野

劇場通りっていう通りなんで、多分それにかけてやってると思う。

渡辺

レンガ通りじゃなかったっけ？

關野

レンガ通りと劇場通りですね。あれは僕の中では、ごくごく当たり前にあるものだったから。

小寺

ほかの色のカーペットもあった。

關野

劇場通りという名前なので、しゃれでレッドカーペットを敷くことになったみたいです。

小寺

今日、雨降ってるから、滑らんでええなと思ったんです。

關野

僕自身、1回離れて、よそ者の視点で、自分の育った場所を見つめなおしていますけど、それでもまだ違うところがあるなあと。そういう意味で資源発掘みたいな視点っていうのは、たくさんの人が関わっていかないと、おもしろいものは出てこないだろうなというのは感じました。

三村

關野さんの新たな発見が歴博や赤じゅうたん。まずは、歴博視察を急遽提案した鎌谷さん、歴博と絡めてどうですか。

鎌谷

歴博を絡めて言うのと、まず、いつでも自分が歴史学の人たちと一緒に、巡見というか、いろいろ回ったりするときは、博物館の中に入って、まずは、通史展示を見る。考古から順番に見て、その後国分寺跡に行くっていうのが大体歴史学の人巡見の始まり方ですね。旧の国が、どこの境で、国分寺がどこに作られたという、昔の中心地だったっていうところに行く。今回、驚いたのが入口に入る

前に、絵図のところで長い時間立ち止まったことですね。歴史学の人たちといるときは、そんなに長く立ち止まることってそんなにないので、いろんな人たちと来ると、いろいろ見るところが違っているのがあった。

三村

いろんな分野の人たちと絡んで回ることによる新しい刺激というか良さですね。

鎌谷

それで言うと、自転車での移動では、最後のほうを走ってたんですけど、皆さんがどこを向いてんのか見てたら、見るところが結構違うというのがすごく面白くて。写真を撮ってはるのも、撮ってるところが微妙に違ったり、立ち止まる場所が違ったり。自分1人で新しい地域に入って、何かを見て行くっていうときと違って、いろんな分野の人と来ると、こういう見方もあるんだ。自分1人で見るときよりも、すごくいろんな視点で見れたので、そういう意味では、この地域を知っていることが1人で来るよりも、とても濃い2日間だったなと思いました。

三村

見る視点で誰が不思議でした？

鎌谷

大体最初は不思議でしたけど、こういうのに注目するんだっていうのは、大体わかってきた。例えば立ち止まるだろうなという場所は、立ち止まってて、写真撮るだろうなというところは撮ってたんです。それと、すごい撮り方がうまいなと思って。走りながらすごい上手だなと思って。そういうふうにして撮ったらいんだな。やり方とかもすごい勉強になりました。

三村

清水さんに、いきましよう。

清水

ぼくは皆さんと今回、立場が違ったのは、岐阜って何となくわかってて、でも、



岐阜市歴史博物館の絵図の前で話している様子。

三村

別に住んだこともないし、實際来たことなんて数回しかないんですけど、だから、一度旅行に来たところに、もう1回調査に来てみたいなというセカンドステップ的な。岐阜はそういう地域だというのが一つあったんです。去年一緒に皆さんと、大体半分ぐらいの方と回ってて、今回、僕、意識したのはどう人を使うか。何かいい効果ありました？

清水

面白かったのが地図の前でね。とにかく聞く。テッシー（手代木）に聞くとか。そういうの、すごく意識してやってみました。やつば深まりますよ。深まるし、すごく早い。情報の出入りがすごく早いから、集団、みんなで調査に行くっていうやり方をやるときとか、ある程度、調査者对被対象者のラポールではなくて、調査者内でのラポールみたいなのがきちんと築かれていた。それが、去年と一番違うところ、一つステップ上がったところかなというふうに思いました。

三村

この流れでいくと、やつぱり手代木さんかな。清水さんが手代木さんに聞くということ、手代木さんが關野さんにじゅうたんについて聞くということ。この流れでお願いします。

手代木

僕は清水さんと逆で、岐阜大に来たことはあったんですけどほとんど何も知らない。中京圏も観光で来る程度で、立ち止まることはほぼなかった。岐阜でしつかりものを見るっていう初めての機会だったので、いろいろ新鮮に映るところがあったのがすごい勉強になりました。

三村

誰と話してた話が一番印象に残ってますか。何が面白かった？何がテンション上



岐阜市内の仏壇屋

手代木

がりました？

清水

手代木

なんだよって答えてくださる。ぼくは、こうして地域を知ってる人と一緒に歩くということが勉強になるというのをつくづく感じました。

アーケード街って結構興味があつて、全国いろいろ街に行ったら、アーケードのある商店街に行けたら行くんですけど、カーペットを敷いてあるのは、初めて見たんですよ。

アーケードにはカーペットが敷いてあるものとか。

(笑)

渡辺  
一同

## 地域資源としての水、リスクとしての水

### 三村

カーペットもそうなんですけど、川が暗渠になつてるといふか、建物と建物の裏のところに川が流れてて、あまりうまく活用してないといふか、もともと川があつた場所に、隠したようなアーケード街だったんですよ。あれって、歴博で見た水路じゃないかな。

### 關野

柳ヶ瀬の用水路は、僕が小学生の頃は探検できました。今の時代では許されないだろうけど、下水道に入つて中を調べてみようといったことを学校でやっていました。どこの水路がどことつながっているといふような。僕の実家裏の用水路も普通に探検ができました。



商店街内の建物と建物の間にある河川

### 三村

### 關野

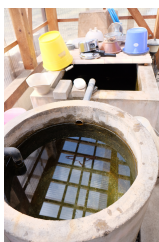
去年視察した、滋賀県近江八幡では、水をうまく使うといふか。用水路を使おうという意識はないでしょうね。ただ、流れている。

### 三村

長良川結構きれいでしたね。うまく取り入れて、環境と共生して住宅設計とかつていふのを、昔からやりそうな気がしてたんだけど、そうでもないというのが、ちよつとあつた。

### 清水

違いは多分、ここは水がリスクだと思つて。管理するよりも、水を制御するほうに意識が向いていると思う。金華山からガンガン水が流れてくるし、湧き水もありそう。



滋賀県近江八幡では、湧き水を生活用水として利用されている。

\*6  
岐阜市のホームページを参照  
私たちの「長良川」と「金華山」  
[http://www.city.gifu.lg.jp/  
secure/12044/5.pdf](http://www.city.gifu.lg.jp/secure/12044/5.pdf)

手代木

關野

清水

關野

鎌谷

清水

鎌谷

渡辺

鎌谷

渡辺

こちら辺、地下水がかなり豊富だってことを何かで読んだ記憶がありますね。<sup>\*6</sup>

確かに滋賀のやつは、「え？」と思いました。全然ああいう意識なかったです。

余裕がある感じのね。近江八幡とか。

そう、余裕がありますよね。水は怖いっていう意識がないように思えました。

いや、怖い意識はあると思いました。江戸時代はずっと洪水がすごかったんで。

琵琶湖が増えるんですか。

琵琶湖が増えるんです。湖岸沿いの村はほとんど何回も浸かってます。

ここだと流されるんですけど。

村ごと流れる？

琵琶湖は、ひたひたになるんです。

## 地域社会のつながり

三村

佐野さんは、今回の視察と違って、もっと、むしろ金華山の中に入っていくという、本職はそっちですよ。今回の視察はどうでしたか？

佐野

初日の醤油がすごく面白くて、後発で入ってこられて、いかに生き残っていくか。いろいろ製品開発してとか。一つの醤油工場だけで成り立ってるわけじゃなくて、大きな桶を作る職人がいて、その職人が酒蔵とかで勤務してたりとか。必ずしも、自分のとこだけで成立しているわけではなくて、それにつながってる人が、まさしく上流から下流に流れていくかのような関係がまとまることで、その醤油とかほかの人とかリンクしてる。だから、一つだけでうまくいくわけではなくて、



### 三村

それをうまくいこと開けていくような人がエリアケイパビリティーという概念にながっていくかなというような感じがした。ほかの酒屋さんとかの新たな取り組みをしていくという、そんな感じのコミュニティがいろいろあって、しかもそれが重層的になっていくところが強くて、うまくいことつながっていきけるのがいいな。そういう仕組みっていうのが、そういう場所がすごくあって、そこをつなげるようなアイデアとかを出していく、それが面白いんかなというふうな感じで、話を聞きました。

昨日、個人事業主が多いというのを王さんと話してて、ここでの印象、コンビニとかが少ないなと思ってたんですよ。いわゆるチェーン店がそんなに入っていない。



たまりや山川醸造の醬油蔵

王

三村

小寺

醤油工場などの現地に根づいた仕組み、この点について、王さんでしょうか？  
今回よかったと思う点は、關野さんが案内してくれて、例えば山本さん（油屋…若だんな）みたいな地元の方の話が聞けたということ。若だんなという存在はかなり大きいかないという気がしていて、地域おこしの担い手としてなんですけど、その4代目若だんなっていう人がいるっていうことが、どういう条件からきてるのか。根本的には地域振興の前提になっている気がして。もう一つ、若だんなって余裕があるなって感じがしたんです。仕事が終わってからは、バンドやったりとか、そこで多分、たい焼き屋のマスター含めて、いろいろネットワークが広がってるのも、何か仕事だけではなくて、余裕があるというか、がつがつした余裕じゃなくて、遊びがあるという感じがする。若だんなさんの存在と遊びという余裕のある部分が、非常に印象に残ってたんです。

小寺さんも、たい焼き屋で、油屋さんに質問で「自治体の消防団の地域の役割をしていますか」って。それまでは仕事の内容をずっと聞いてたけど、ちよつと違った視点で。感想も含めてどうでしたか？

非常に本当に面白かったです。皆さんの意見は共通してて、質問とか、言い合いとか話し合っているの聞いて面白かったですし参考になりました。あと、現場で質問できる機会が、非常に僕自身、なるほどなと思っただけです。まだこっち来て間もないですし、まっさらな状態で行って、ここ全然知らないですし、地域でどういう問題があるのかなというのがわかったらいいかなと思ってたんで、最

たい焼き屋のポスター



三村

小寺

關野

小寺

三村

關野

初はぼーっと見てました。一番気になったのは、今回、お店にポスターありませんでした？小学生か何かが作った。たい焼き屋さんやったか？

書いてありましたね。

旅館にもありました。結構あつたんですよ。

山川醤油にもありました。

ありました。結構あつたんですよ。しつかり頑張つて書いてあつて、すごい良いなつて、美しいなと思いました。それからさらに歴史博物館とか、非常に充実してて、非常に貢献してる。外から来た人にも、それから小学生にも、貢献してる。非常に美しいと思つたんですが、同時に、それがこの街の問題を露呈してるのかなと思いました。そういうふうな例えばお店とか、地域とつながりたいという思いがすごくあるのかな。だから、何とかしなければいけないと思ってるからこそ、ああいう行動に出てるんじゃないかというふうに、ちょっと思いました。うまくいつてるかどうか、判断できないですけど、多分いつてると思うんですけど、でも、ああいう行動を積極的に行つてるといふ姿は、ここに潜在的にそういう問題が強くある。地域の人が一番解決したいなと思つてる問題かなと思いました。

たい焼き屋の小学生が書いたの、あれつていうのは、どういう話からきてるか、知ってます？

あれはおそらく幼稚園に呼ばれて、たい焼きを作りに行ったときのもの。たい焼き体験をして、そのときに子どもたちが描いてくれたものだったと思います。森

さん自身はそういう意識はまったくしていなかったと行っていました。まちづくりを研究している人にいわせると、いわゆるプラットフォームのような場所だそうです。もつとも森さん自身はそういう意識はなく、単純にみんなが集まって何かおもしろいことをやってほしいという思いですよね。紙芝居をしたり、年末は餅を焼いたりだとか、そんなことをいろいろとみんなにやってもらいたい人です。福丸さんには、そういうことに関心のあるような人、山本さんみたいに奥さんを見つけた人もいるけれど、そういう不思議な出会いがあった。それに場所が狭い。あの狭さがポイントです。あの狭さが、多分、今の僕らには、なかなかない。あの密着感がない。けれど、あそこに入ったら密着せざるを得ない。だから、必然的に話をすることになる。僕もずっと通っていた一番の理由はそれです。あそこに行くとは大体しゃべる相手が来ます。もちろん、全然合わない人もいるし、この人來たら勘弁してくれて、そういうときももちろんありますけど、そこがあの魅力かなというふうに思います。

## 重層化するコミュニティ

渡辺

岐阜大卒業と言いながら、ほとんど岐阜にはいなくて、知らなかった。岐阜大の連中とつき合っていると、あまり岐阜市のこと知らないなって。だから、そういう影響を受けて、自分も岐阜って結構外からのものに頼ってるのがたくさんあるんじゃないかなど。あんまり岐阜で、岐阜らしいものっていうのは、いったい何なのかな、結構エリアケイパビリティーみたいなところ考えたときに、ここってどうやって設定すればいいのかなって。当初、ここに来る前の仮説は、名古屋とかあの辺との関係を見ないと、こういう小さい商店街のところもわかんないのかもしれないと思ってたんですけど、実際に行ってみると、実は結構コミュニティがたくさんある。狭い範囲で地域の人たちが所属するエリアがいくつもあって、それがオーバーラップしながら重なってるんだよっていうことを話してたじゃないですか。油屋さん、ヤマカワさん？

關野

渡辺

山本さん。それは結構小さいエリアっていうのが、たくさんできるんだな。例えば油を卸す店舗が500店舗あるっていうのは、名古屋には行っていないわけ。結局ある程度自分の車で行ける、何十分の管轄の範囲内で、ほぼその人たちの活動は一時的には、プライマリーな部分として、そこから発生した部分はわかんないですよ。ある程度かなり狭いところで区切られて、たい焼きのおっちゃん

※7  
美殿町ハロウィン  
2008年に美殿町にある和菓子屋の  
若女将・林マーガレットさんが提案し  
たのがきっかけ  
<http://misono-machi.com/>

關野

渡辺

關野

渡辺

關野

渡辺

關野

渡辺

コミュニティとして、そこに来る人たちっていうのも、名古屋からワーツと来てやるっていうよりも、ある程度バウンダリーがあつて、その人たちがほとんどなんでしょう。そう考えていくと、ある程度この美殿町のバウンダリーは設定できるなというふうに思つて、その中で意外と、いろんな生活も人の関係も成り立つてるなということがわかったのが、今回の面白かつたなところなんです。だから僕の一番最初の仮説は、全く裏切られて、かなり小さいところで、彼らの生活っていうのは、成り立つてゐるっていうのがわかったというのが、一番の発見でしたね。たい焼きのお客さんは、結構遠くから来ています。歩いてこられる範囲にすんでゐる方もいらつしやいますが、意外に、みんな遠い。自転車とか車で来る人多くて、けど、いきなり名古屋からはないですね。

たまにそういう方もいらつしやるみたいですけど、まれですね。車で20分、30分圏内のあたり。友達が友達を呼ぶっていう感じになるので、そんな感じです。ただ、そういう個人のつき合ひはもう少し狭い。美殿町のあの商店街が中心になっているので。


ハロウィン<sup>※7</sup>もそう。ハロウィンは今、外からだいぶ来てるんですか。

そう。よそからたくさん来ていますね。ただ、もともとの始まりは、

その辺の人たちでやろうやと言つて、

個人的。

そこにじいちゃんばあちゃんが、喜んだって話があるじゃないですか。だからあ

A large-scale fire festival at night. A massive wall of sparks and fire fills the upper two-thirds of the frame, creating a dense, golden-brown curtain of light. In the foreground, several people are silhouetted against the bright fire. One person on the left is holding a small, glowing object. Another person in the center is holding a long pole. The overall scene is one of intense light and movement.

る程度閉じたところで、何かが動いて、それが最終的に拡大するのかどうかは、別として、コアとなる部分は絶対にある程度閉じた小さいコミュニティなんだというのが、わかった。だからそれは面白かったですね。

長良川河畔で毎年行われる手力の火祭り

300年続いているといわれ、各町内ごとに神輿を担ぎ、火の中を裸男衆が練り歩く（写真は2013年の夏に撮影）

## 2. 岐阜市美殿町でエリアケイパビリティを考える

三村

今回の視察では、ほかのプロジェクトの考えをみんなで考えてみる。今回は、エリアケイパビリティという概念を、わかんないなりにやってみた。センの言うケイパビリティ<sup>\*8</sup>とエリアケイパビリティの、最も違う点というのは、何ですか。

渡辺

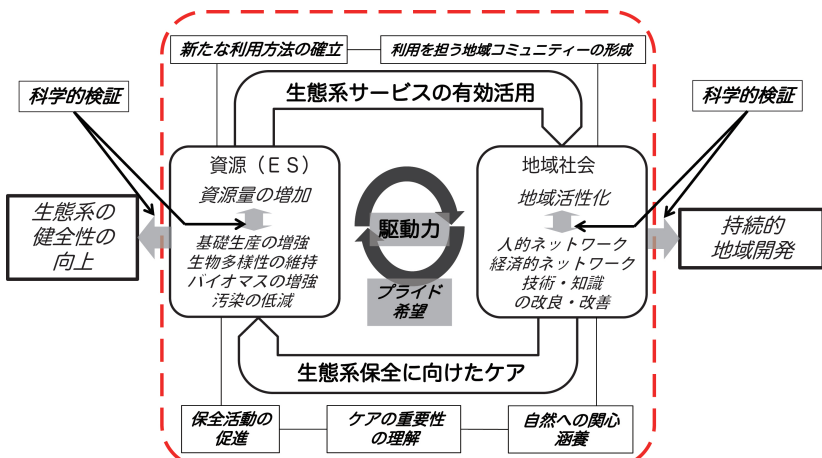
最も違うのは、センは個人。でも、エリアケイパビリティの場合は、そのエリアがどういう能力を持つてるか。この地域やほかの地域とか、またはエリア内でもいいんですけど、エリア内でどんな関係性が構築されてるか。個人に帰結しない。センは個人だけ？

王

渡辺

個人だけです。個人しかあり得ないということです。センが言うケイパビリティというのは、例えば、たい焼き屋のおっちゃんか、自分のお客さんを何人持ってるかっていうのは、収入を得るオプションをいくつ持つてるか。顧客が何人いるかっていうのは、一つのオプションです。でも、おっちゃんを成り立たせてるのは、そのお客さん相手だけじゃなくて、多分もっと違うところのネットワークとかがあるたりするんだと思うんです。人間のケイパビリティっていうのは、そういうった個人が持つ能力やネットワークで成り立っているということです。でも、僕らが考えたいのは、例えば美殿町なら美殿町の中で、生業がたくさんあって、そこで人々のコミュニティの関係性がたくさんあって、そういうものの総体が、高い状態にあることが、エリアとしてのケイパビリティが高いんだっていう言い方をします。

<sup>\*8</sup> アルティアセンのケイパビリティ  
1998年ノーベル経済学賞受賞  
capabiliとは、経済・教育・医療などの  
の精度によって社会的に保障される個  
人の能力。



### エリアケイパビリティ（AC）の考え方

地域社会が特定の資源を利用するとき、資源収奪的な方法を用いてしまえば資源の持続性だけでなく地域の持続性も失われてしまう。これを回避するためには、資源を利用する地域コミュニティが自然への関心を涵養し、ケアの重要性を理解し、生態系の保全を促進する必要がある。この地域コミュニティから生態系へのケアの流れと、ケアを重視した資源利用の流れ（生態系サービスの有効活用）が循環し続けると、地域のケイパビリティは向上する。この循環のことを、「エリアケイパビリティサイクル」と呼んでいる（石川・渡辺 2015）。

なぜ、「エリア」なのか

清水

コミュニティでもなくて、社会でもなくて、エリアにする。これって、何か理由がありましたよね。その話、どこかで聞いた気がする。コミュニティケイパビリティではなくて、なぜエリアなのか。

渡辺

まずそこは、二つあるんですよ。生態系っていうところと社会で人と自然の関係を中心に考えてる概念なんです。だから、ある生態系があって、それを利用する人間があって、その間の関係をどうすべきかっていうのがベアシックなところなんです。なので、コミュニティはコミュニティのエリアがあるし、生態系は生態系のエリアがあって、だから、コミュニティとしてしまうと、生態系のほうのエリアがわかんなくなる。生態系となると、コミュニティのエリアがわかんなくなるというのがあるので、それはそれぞれのエリアがあっていいんです。だから、そういう面でコミュニティってしてしまわないほうがいいです。エリアにしたほうが。

清水

人間以外の？

渡辺

地理的な空間。

清水

空間なんだ。

渡辺

空間です。というのは、その空間を利用するっていうのが、立ち位置なんで、資源っていう意味で。だから、こういう都市部で、エリアケイパビリティみた

いな考えを持ってこようと思うと、もうちよつと違う工夫をしないと、空間つて  
いうのが決まらないつていうのはあります。

ぼくの認識は空間は可変でいい。

可変でいい。

どういうものを見て、どういうふうに使うか。ある範囲を入れる入れないじゃない  
くて、入れるべきか入れないべきかとかつていう、そういうプロセスの中でエリ  
アが決定されてきて。空間化することもできるし、概念的にもおけるというのが  
エリアの定義つていうところなんです。そこは、何を見るかによって変わつてく  
るというだけで。

だからバウンダリー設定はしなきゃいけない。

多分、最初のステップがある。これを見た場合、バウンダリー設定ができて、こ  
れが適切な、このエリア、この場所のこういうエリア設定だというのがやって、  
もうちよつと広げるべきかは、それから。

アダプティブに。

やるつていうことですな。

ある意味、すごく似てる作業を、多分みんなしてて。

してるんです。

ぼくら、アフリカでやるときにもセネガルでやってて、例えば、ウオロフがいて、  
セレールがいて、これつて全部属性じゃないですか。だから、じゃあ、セネガル

清水 渡辺 清水 三村 渡辺

三村 渡辺

三村 渡辺 三村

渡辺

清水

渡辺

手代木

渡辺

ならセネガル、ウォロフ社会っていうふうに言うのか、セネガルのつていうのか  
によって問題設定が、全く変わってくる、  
全く違うんですね。

その作業を多分やるわけでしょうね。

いろんなケーススタディを集めたりっていうことですね。だから、みんないろんなところでそれを考えてもらうと、いろんな方向のエリアが出てくるし、エリアの設定の仕方もいくつかのパターンというかケースが集まってくるほうが、明らかに次のステップにいきやすい。

自然と人間と言ってたじゃないですか。自然のほうというのを、どう捉えるか。例えば今回の、ある商店街もしくは岐阜っていうのを一つのエリアとして定義した場合に、「うまく回る」というのが、僕はということなのかわからない。

自然資源があつて、何か違う資源みたいなものを考えないといけない。何とかリソースにするか、何とかキャピタルでもいい。何かのそういう利用するもの。または今は利用していないけど、潜在的に利用価値のあるものみたいなものを見いだす作業をまずして、それを生態系と入れ替える。こっちは社会でそのままいいとして、要はそのリソースを何かつていうのをはつきりさせて、そのリソースを利用する方法っていうのを一つ考える。リソースをまた拡大させていく、消耗させていくじゃなくて、拡大させていくっていうふうにするにはどうすればいいかっていうのはケアを考慮すること。そのリソースをどう利用するかっていうところと

一緒に、そのリソースを消耗させない、減らさない、劣化させないためにはどうすべきかっていうのも同時に考えるっていう二つのことをやる。

美殿町と金華山（岐阜シティ・タワー43からの眺望）



## エリアの定義と対象設定の困難さ

手代木

\*9  
2014年10月の機構長裁量経費による「推進セミナー・フィールド座談会」のこと。

フリリピン<sup>\*9</sup>のときとかに石川先生とお話をして、いろいろ伺っていたんですけど、まだ僕の中で消化しきれてなくて。例えばたい焼き屋さんの周辺地域で生態系のエリアケイパビリティを高めるのだったらイメージしやすいですけど、それをいざ、例えば物流であるとか、流通であるとか、そういったものが主体になったとして考えると、長良川の上流を考えなきゃいけない。少なくとも歴史的には、さらに現代になってくると、油はブルキナファソから来るとか、そういうのを踏まえると、エリアっていうのが、何を対象にするかによって、広がったり縮まったり、そういうのを僕はこういうふうに解釈するのにかつていうのが、よくわかってないんです。

王

\*10  
生態系の健全性  
再生可能な資源や生物の量が環境変動に強く、生態系サービスが多様に共存できる場として健全であること。

うまくつながるかどうかわかんないんですけど、石川プロのエリアケイパビリティの中で生態系の健全性<sup>\*10</sup>っていうのが、入ってるじゃないですか。すごく粗く言うと、今回ここ、岐阜で生態系の健全性を考えて意味があるかというところ、あんまりそういうの考えなくてもいいのかな。それは、じゃあ、どういうことなのかっていうと、流通していたものは半世紀前は材木で、今はそういう流通が海外に変わってるっていう話。でも、違う言い方をすると、岐阜は、いわゆる天然資源という意味での、森林とか木材っていう資源をもう捨てたんだろう。だから、生態系の健全性うんぬんっていうことを気にしなくてもいい構造みたいなのを、時間

三村

をかけて築いてきて、今日があるのかな。そういう気がしたんですよ。

その辺は、渡辺さんが言ってるエリアの定義と見る対象によって異なること。そのバランスをどうするかっていうのが、仮にこういうエリアという言葉を使うときに、そういう問題があるんじゃないかな。

王

当然、エリアケイパビリティーというのは、生態系だけを扱うものではないから、こういう商業地のエリアケイパビリティーっていうことも考えなきゃいけないセッティングになったのかと、今回は思った。

清水

そのエリアを決めるバウンダリーなんだけど、つまり、空間で区切るのか、概念で区切るのか、全然違ってくるわけですね。いくつかの資源の中で考える。バウンダリーというのは、実は全然一般化できないレベルにある。それは一旦おいとして話を始めていかないと、多分何も先に進まないし、バウンダリーをここで設定するということと、実際の現象を見ていくこと、行ったり来たりしながら、反復しながら、お互い決めていかないと、それこそ本当に荒唐無稽な話になってしまう。地元愛とかっていうのを見なきゃいけなくなってしまうのって、多分この反復活動をせずに概念化しようとするから、そういうふうなものしか見えてこなくなっちゃうというのがある。それこそ、例えば経済とかで見たときに、多分岐阜なんて、名古屋と切り離して考えると、うまく理解できないし。

小寺

ケイパビリティーに、エリアっていうのを入れることによって、勝手に理解したのは、エリアっていう概念の違いっていうのも重要。それプラス、ややこしい話をもっと

佐野

シンプルに説明理解できるようにする。そういう作業をしているのかなっていうふうに勝手に理解してたんです。今日、いろいろ話聞いたら、概念、エリアの定義がついていうことになって。僕、エリアって勝手にポンと決めてしまつて、いきなり始めて、その中にケイパビリティ何やっていうの調べて、フォーカスしていくもんもあると思います。いろんな商業が必要やつたら、商業のケイパビリティとかそれにつながったようなのも全部それひくるめてケイパビリティ。バウンダリーっていうのは、最初岐阜であつたら岐阜市つて決まつてて、その都度修正が必要で、最後にエリアの定義も決まるし、面白い話があると、そういうふうに思いました。エリアっていうのは、もっと難しいもんじゃなくて、もっとわかりやすく、シンプルにっていうもののがエリアケイパビリティなのかなと、僕は勝手に思つてます。

岐阜の場合は、名古屋ともかなり流通でつながつてるといふことはそうだなと思ひまして。最初のエリアのところは、経済活動とかそういうのつて、どんだけ利用してるかとか、そういう範囲というので決めてやつて、その中でどういうふうな動き方をしてるとか、そういうのを見つづ、そのエリアを広げるなり狭めるなり、その新しい概念とかそういうのを、与えられたエリアの中で考えていく。その一つが流通とか、そういうのをバンと決めてやるのがいいかな。最初からエリア、バウンダリーを考えると清水さん、言われたみたいに、ぐちゃぐちゃになつてくると思ひます。

地域っていうのをどういうふうに区切るかっていうのを、歴史学とか特に古い時代で言うと、それもまたいろんな区切りがある。今、この地域っていうふうに決めたときに、一つ二つ核となるもの、名産品とかですけど、何とかっていうのがあって。それでつながる関係っていうのを見ていくときに、その核となっているものが、すごい前からあるもんだよっていう感じで伝わってきてる。けど、実はすごい昔に1回断絶してて、それを一つみんなをつなげるものとして、昔からあるっていう伝統で、またつなげているものっていうのもあると思うんです。そういうのを調べるときに、断絶したときに何があったから断絶したかとか、断絶するまでとその違いがどうあるのかっていうことを、知ってもらいたいなと思って。その役割を古い時代をやってる人間として、皆さんのフィールドで役立てるかなというのちよつと考えてたんです。私は日本限定ですけど、そういう歴史学からの見方で、いろいろ話ができると楽しいなっていうことを考えながら聞いてました。

まず、エリアケイパビリティーのエリアってとこなんですけど、かなりアダプティブに決まってくるんですよ。例えば、ここだったら名古屋でもいいし、それが、セネガルとかでもいいですけど、そこを一つのエリアとはしないほうがいいか思っていて、逆に一つのエリアがあつて、その周りのもうちよつとバツファエリアみたいなのがあつたりとか。それからこのエリアとこのエリアは、一つじゃないんだけど、線で結ばれてるとか、サテライトにあるっていう感じ。例えば、職場っていうエリアがあつて、居住地みたいなエリアがあつて、そこそこは線であつない



今でも古い街並みが残る



楮でのランチの様子

じゃったほうがいいんじゃないかなっていうふうに思ってるんです。そうすると、エリアとエリアの関係性っていうのがわかってくるんで、でも、それを全部パーツと例えば東海エリアみたいにしてしまうと、何かぼやけちゃうと思うんですね。中心点みたいなどころ、重んじていうところが。だから、要は対象物を何にするかっていうところまで考えたときに、それでまず、その最小エリアってこれぐらいじゃないっていうのを、まず見当をつける。その中で、解決する部分と、そこ、ある違うエリアとの関係性みたいなどころで理解しないといけないところというのをやってやったほうがいいんじゃないかなというような考え。

## 「地元愛」は駆動エンジンか

王

沿岸資源っていう対象があつて、それは割と比較的身近な。あるいは狭い空間で扱つてるものも例えば魚だとか。そういう場合には、その生物への愛着を含めた地域愛っていうのは、多分すごく大きいファクターになるんじゃないかと思う。それは何となく地域愛に注目するようになった理由ってわかるし、あながち間違つてはない仮説だと思いますよね。それと例えば、岐阜で愛情だけに限定しないっていうのは、多分、駆動しているものもろの何かっていうのは、沿岸地域社会とは全く違うものっていうことですよ。

清水

空間だけで切りきれないのもわかるし、概念系だけで切りきれないのもわかるけど、でも、多分今のやり方だと、最後あれじゃないですか。それを駆動させるのが、愛とかって話になつてくるでしょう。ケイパビリティを高めていくことの。

渡辺

地域愛とか。

清水

ぼくは、正直な話、一種、狂言に聞こえることもある。話わかるし、歴史学とか、哲学とか、僕ら文化人類学とかでいっぱいそういうのを扱うけど、言葉は悪いけど、そのセンスみたいなものが感じられない。そうしたときに、何なんだろう。ここ、岐阜とか見ると、それ、逆にわかると思うんですよ。

關野

地元愛っていうのに、あまり僕は執着してほしくない、個人的な思いもあるけど。評価基準としては適切でない。感覚としかいえないものだから。

清水

駆動力ではない気がする。名古屋とか例えばもつと昔だったら、日本海側と、近江、京都とのつながりとかという流通先、ああいうのをどれだけ見ていくかによって、その結果として、地域愛とかってあるような気がする。



たい焼き屋の森さん



山川醸造の山川さん



油屋の山本さん



岐阜市歴史博物館のボランティアの方

## クオリティオブライフ (QOL) を高めること

清水

もうひとつ大事な概念ってクオリティオブライフ (QOL) \*1でしょ？

渡辺

\*1  
クオリティオブライフ (QOL)  
豊かさやサービス、精神面を含めた社  
会的な生活の質を評価する概念

ええ。人間社会の一番の目標は、QOLなんです。資源は質の定常化、もしくは向上のどっちかです。

清水

とにかくそういう例として、例えば、経済的な生態学的、エコロジカルエコノミー、変か。まあ、いいわ。経済環境みたいな話を考えて。

三村

環境経済学がありますよ。

清水

例えば、岐阜というのは、ある中心性を持たなければならない。この中心地、岐阜がある文化の中心地としてここに人を集めなきゃいけない。というのはQOL。これっていう場合と、岐阜は名古屋の従属の地であって、ここに中心性は持たない。でも、ここで生活してる人たちが、過不足なく、ある程度の充足感を持ちながら、生活できる空間を作らないとならない。この二つは随分違ってます。

渡辺

だから、それは地元が決めるしかないです。

關野

となると、地元の愛着っていうのがすごく疑問なっちゃう。

渡辺

愛着っていうのをどう考えるか。愛着があるから何だっていう話でしょう。じゃなくて、難しいな。ケアの一つなんですよ、愛着っていうのは。ケアの在り方の一つであって、例えば、岐阜が名古屋との従属的な関係の中でQOLを豊かにしたほうがいいのか、それとも、中心っていうふうにして豊かにしたほうがいいのかは、

ロイヤル劇場 昭和の名作シネマ



清水

渡辺

清水

渡辺

關野

清水

渡辺

關野

渡辺

誰が考えるかっていうと、地元の人しか考えられないです。

それを例えば商店街の劇場みたいに、最新の映画を捨ててるんだよ。高倉健の昭和の名画座みたいな。それって地元愛なのかなっていう。

そうそう。愛着という言い方のイメージを、どう捉えるかっていうこと。それと考える人っていうのは、地元をどうしたいかを考える人ですかね。

地元のことを考えるのは当たり前。

地元のことを考える人が考えないといけないっていうことです。だから、地元愛っていうよりも、地元に対して何かの考えを及ぼす気持ちぐらい。

全般的に岐阜をどうしたい人が多いわけじゃない。エリアは狭いです。

岐阜よりも、もっと小さい。

もっと小さいかもしれない。だから、適切なエリアを決めないといけない。もしかしたら家族までいくかもしれないですけど、わかんないですよ、それは。

結局、個人のつながりっていう話に戻ることになりますよね。

多分、そこはつながりなんです。やっぱり家族じゃなくなると思う。もうちょっと大きい、何かのコミュニティっていうエリアがある。その中で、結局コミュニティを、どうしなきゃいけないのかとか考えるっていうことは、そのコミュニティにいたいとか、コミュニティをもっとよくしたいとか、自分が心強いコミュニティとしていてほしいとか。それを愛着と呼ぶかどうかはわかんなくても、そういう気持ち。それに対して個人の利己主義じゃなくて、もうちょっと相手への共感とか、

その中のコミュニティをどうしたいかっていうような利己的じゃなくて他己的に、  
そういうイメージですね。

關野

僕がひっかかるのは、この町の人たちがやっていることは、地元をよくしたいという熱意とよそ者から思われてしまうこと。どちらかといえば、面白いことをやっているから、好きな人はそれに乗っかりうという感じで人が集まっている。たまたま、結果的にそういうふうになったっていう感じなので、一般的な愛着の地元愛ってこういうイメージとすごい差がある。

渡辺

僕もそれは正直ある。だから、愛着っていう言葉よりももうちょっと、単なる共感って言っても変だけど。

關野

ケアっていうかそっちのほうなんです。重要なのは、でも利己じゃないんですよ。利己というか、他人と一緒に楽しめるって感じ。

關野

だから、OUTっていうのは、ただ地元愛だけじゃないことは確かなんです。もうちょっと根源的に自分がある場所がいい状態であってほしいとか。

渡辺

多分愛情じゃないんでしょう。

清水

じゃないと思うんですよ。

渡辺

でも、あの言い方でやると、すごく例えばナシヨナリズムみたいなことを、想像してしまつて。

清水

ナシヨナリズムの、地域ナシヨナリズムみたいなにおいがある。

王

面白いんだけど、ちなみに嫁が福岡の出身で、ナシヨナリズムがすごいから、九

清水

州の人ね。しかも、選民思想的な、福岡は偉いみたいな、すべての日本のトップをいつてるみたいな美人が多くてとか、めしがうまくてとか言い出すから、そういうの、駆り立てるようなこと言っているのかとか。つまり、空間で区切ったときに、そうなっちゃうじゃないですか。空間で区切って地域愛って言ったとき、空間に行くという、存在するというのを鼓舞するからということだと、そうじゃない？

渡辺  
ただ今、それがボトムアップで、九州人がそうだと思ってるんだったら、それがいいのかも。九州の人間と。

清水  
だから、客観的に面白いんだけど、それは。

渡辺  
けど、その辺の言葉の使い方とかが粗いんですよ。僕らは。特に理系は。何でも使っちゃうんですよ。明らかに足りないのがヒューマニティ的な部分なんです。僕らはそれが欲しい。

清水  
有名なイギリスの歴史学者が、伝統というのは、創造されたものであるという。つまりナショナリズムを支える部分。例えば、スコティッシュキルトがありますけど、あれって、別に伝統的なものでも何でもなくて、100年ぐらい前に織物屋が勝手に作って生み出したものだし、バレンタインとか不二家の戦略だったとかね。ああいう話が積み重なって伝統ができていく。地元愛でやってたかじゃなくて、自分たちの生活に根差したような話になってくるのかなと思います。



長良川と岐阜城

### 3. 学際的に萌芽研究を探る

#### 地域資源化するときの研究者の役割

三村

例えばエリアがあつてそこに住んでる人たちの、幸福度が上がるのであれば、それだけで評価してる？

渡辺

粗っぽく言えばそれでいい。

三村

例えば、建築で言うと、緑が多いそういう建造環境がすごくいい状況から人はよさを受ける瞬間みたいなものがある。人じゃなくても、そういう空間エリア、建造環境のよさから考えられる。それが例えば指標とか項目として評価できるのが、もうちょつとそつちも入ってくるのかなと思つた。

渡辺

一般化？一般的に人間は緑があるほうがいいんだという、一般的な概念を入れたほうがいい？

三村

偶然生まれる、例えば山があつて、そうすると風が入ってきて、ここに川があつて、そこから涼を得られる。すごい偶然的な空間つて、たまにあつたりするじゃないですか。この場所はすごくいい。そこに住んでる人が、ある日偶然できた空間を発見して良いとか。いわゆる緑地率何%みたいな話とはちよつと違って、その周辺環境も含めて、ある特殊なスポットができるというか、そういうところを人はいいというふうに評価してる場合もある。

手代木

偶然でできてるわけじゃない。必然でできていて、それを歴史的に人が選んできたかというのがある。

關野

城下町、樂市樂座の場所だったといわれるところに一本だけ高い木がいまだに残されています。そこだけ、不思議に神社になっている。

三村

どこにでも、そういう偶然スポットみたいなのがあるはずで、普段は現地の人が決める、現地の人がやるというよりかは、外部の人が入ることで、現地の人が気づかなかつたものを生んであげるということも。

渡辺

逆にわかってきた。僕ら、それを潜在力と呼ぶんです。潜在力っていうのは、それを発見しない限りにおいては、資源にならない。

三村

そこが結構重要なポイントなんですよね。だから、今ある状況を評価して何かという話じゃなくて。

渡辺

もちろん。そんな中の潜在力がどんなものがあるかというのは科学的な分析とかデータに基づいてやんなきゃいけない部分。それをプラスにすることによってそれを顕在化させて資源化することによって、さらにCO<sub>2</sub>を上げるほうに使えるなら使うとか、それは研究者が一番貢献できやすい部分。

三村

赤じゅうたんの話、飛躍しすぎかもしれないけど、日本で見たことがない特殊な通路ですよって言われたら、あの商店街もしかしたら人来るかもしれない。

手代木

僕は何かそれはある意味危険な。何というか、研究者がついていうふうな部分で、今まで地域おこしというか、そういうので失敗してるわけじゃないですか。だから、

専門家の人がこれがいからっていうふうに街を上げてやったのに、失敗するっていう事例は恐らくくさるほどあって。

三村 町おこしは、まあ。

手代木 だから外部の人が意見をするというのは、例えばカーペットが実はすごくて一億円かけてあれを観光客に、観光地化するぞというふうなことをやっても誰も来ないということは十分あり得る。

關野 一時的には来るかもしれないね。ただ、継続力が。

手代木 そういうところをどうケアしながら、われわれがそういうことを提言できるのかっていうのはすごい難しいところだと思って、安易に。

三村 ぼくがやった研究でわかったことは、いいものはいって言いたいです。それは確かに失敗する可能性もあって。手代木さんが言うことは、わかるんですけどそれでも挑戦したいっていうのがある。失敗しないために評価基準があったりとか、地域の人が継続的にやっていくアプローチの方法を見せていかないとダメかもしれないけど。

渡辺 ぼくはテッシーに近いっちゃ近い考えで、向こうがこういうものが何か価値がありそうだから活用したいんだって言われたら、自分たちにできることは、こういうふうなことがあるんで、それに対してはサポートしますよっていうようなスタンスが、僕はいつも取ってるかな。例えば社会学者がいて、その人は研究室持っていて、学生はいる。その学生たちは、町おこしとかに興味があつて、ある商店

三村  
渡辺

街というか村、町おこしたいという相談に社会学者が聞いたときに、自分たちに、  
どうこうしてほしいのを期待しないでくれと最初に言う。自分たちができるのは  
ボランティアの学生を集めるとか、あと、わいわい、がやがや若いの連れてきて、  
その場をにぎわす。

ワークシヨップなんかそうです。

それはやる。でも、何かコンサルティングなことは期待しないでくれと。結局自  
分たちが本当にやりたいと思っけないものは、どうせやつても長続きしないんだ  
からっていうので、そんなスタンスでいいんだったら、やるよみたいな。最初は  
向こうの人も無責任だとかそんな感じだったみたいけど、今は、結構楽しくお  
互いやつてみたいで、そんなことのほうが、実はいいんじゃないかなっていう  
の最近思う。

關野

ただ、あそこの美殿町の場合は、研究者が入って失敗してる。あそこは結構、ま  
ちづくりの先生が入ってやるんだけど、商工会の会長さんとたまにたい焼き屋で  
話すけど、学者さんが言うのは20年、30年後のビジョンしか示さない。うち  
ら困ってるのは1年後、2年後の話、それに対して何をやるんだっていう話を  
されたときに、僕らはできないですよ。研究者がやろうとしてることとすごい  
差があると思うんです。そこはものすごい難しいし、僕は、あまりかわらない  
ようにしてるのは、それが一番の理由なんです。そこは考えていかないといかん  
のじゃないかなと思うんです。あと、町おこしたいと言ってる人は一部の人のな

三村

ので、あくまで住民の中、商店街とか、いわゆる一般的に普通に住んでる人がそこまで思い入れがあるかっていうと、それまた別の問題なので、そこももう一つエリアとかいろいろ考えるときに難しいのかな。

アニメの聖地は、いきなり知らない若い人がドバッと来て、お金落とすけど、すごい困惑するとかあるじゃない。

關野

三村

王

あんまり来てほしくないってことでしょう。地元の人にとすると、そんな感じですよ。もともとは活性化しようとして動いてたけど、逆にメジャーになった瞬間に、美殿町は、研究者が言ってることと自分たちのニーズのずれをちゃんと理解して批判的になってるっていう点では、しっかりしてる地域なんだな。

關野

王

おんぶにだつこという姿勢ではないですね。

それでも何か地域の方に貢献しようとすることは、研究者として、全然問題ないと思う。例えば自分がすごい何々学の権威で、自分の一言が地域にすごく影響するっていう人たちは、特に気をつけなきゃいけないけれども、例えば僕らみたいなって言うたらあれですけど、この地域だったら、面白そうだから乗つかるとか、協力するっていう、その乗りに対して、僕らが言ったことが面白いと思ってくれるかどうかの、それだけの問題っていう気がするんです。

渡辺

王

何が問題ですか。

例えば研究者の提案に対して、それ面白いねって言うってもらえるかどうか、それだけ。面白いと思ってもらえるんだったら、一緒にやったらいいし。面白そうで

ないなら無理にすすめないっていう感じが大事。

關野

まちづくりの先生は、あまり面白い話をしない。結びつきがどうのこのとか。

王

研究とアイデアは違くて、本当は多分研究にもアイデアが必要なんだけど、それのない研究っていうのたくさんあるし。

關野

特に行政が絡んじやうと、行政に対する受けのいい研究者が選ばれるのでそこが非常に難しい。

渡辺

予算がつくってというのは、ある意味難しくて、それは使わなきゃいけないってなっちゃうと、違う方向にいつてしまうっていうこともある。

佐野

地域おこしをやらんといかんというよりも、楽しんでやっているとこのがよくて。その何が違うかとか、そういうのをわれわれが課題とかを提示してあげる。彼らは楽しんでやってるけどもその中に良さがある。その背後にあるものが、なんなのか。そこを一緒に作っていく、地域おこしというのはそんなに簡単なものではないけど。

渡辺

レッドカーペットの話になると、自分も何個か街見てきたけど、この町おこしの仕方は、こちら辺に特徴があるんだよというのを説明するとか、これはそういう面ですごく特徴があるし、成功してる面じゃないということを、客観的にいうのは、一つ重要なのかな。それを押しつけるんじゃないくて、いくつかの事例を見てみると、ここが成功してるというのは、こういうところにあるんじゃないかなというのをちゃんと客観的に見るのは、研究者としては重要です。

手代木

さつきは、研究者は必要ないみたいなこと言ったんですけど、まさに今、渡辺さんが言ったのが、取るべきスタンスだと思っていて、客観的に物事を提示するということ。地域おこしするときに、研究者の側から何か一緒にやろうとかつていうかたちではなく、街の人とか、その人が主体的にやっていく中で、その中で必要なデータの提供であるとか、協力を要請されたらかわるっていうか、そういったかわり方しかできないんじゃないかな。

佐野

最終的な決定は、地元の人。

手代木

出すものを出すっていうのが、一番あるべき姿なのかなというのは思ってるんです。

小寺

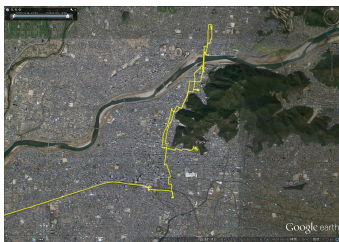
研究者としてやることの問題を、いろいろな問題があるかもしれないという点についてなんですけど、怖いです。研究者が地域の実際に住んでる人の生活を変えられるかもしれないっていうの、すごいリスクがあるんですけど、そのとき研究者にもリスクがある。研究やって、論文も書かないといけないし、プロジェクトあったら、プロジェクトリーダーの言うことかなあかんし、やっぱりそんなに言い訳も考えてしまいますし。データの取り方とか、進め方とかも、どうしてもそっちに足引つ張られると思うんですけど、研究者って名前も、地球研という名前があるかもしれません。だから、やり方として、いつそのこと、研究は研究。何かアクション起こすときは、例えばこういうプロジェクトというのでやってますけど、NGOっていう、例えば、極端な話で言うてるんですけど。もちろん個人です



座談会の様子

から、研究者と能力が違う研究能力がある人がやるんですから、地域にとっては  
すごいと思う。極端な話、そこまでいかないと、研究者が地域のことには何か  
をするという問題は解決できないのじゃないかなと思うんです。

トラック結果をGoogle Earthで表示して視察の軌跡を理解する。



## 研究の萌芽を探る

渡辺

ばくは、自分の中で課題があつて、一つは、自分のスキルを、若手研究者のコミュニケーションの中でちゃんと紹介して、みんなで情報シェアしたいなっていうのがあつて。一つがこれ。こいつですつとトラックして、こういうふうに全部どこからどういったか。こういうのを見ながら、例えば鎌倉さんがさつき、どういふところでどういふふうな写真を撮ったんだろうとか話してたじゃないですか。そういうのは、あとからみんな写真シェアしていくと、この場所で、この人はこういうふうな見方で写真撮ってたんだっていうの振り返ることが、できるようになってくるんですよ。こういうのを保存しておくっていうのは、みんなの視点をそのまんなま共有ができて、あとで、この人、こうやって見たんだっていうの振り返るっていう意味で、役に立てほしいなっていうのがあります。

三村

やりたいですね。

鎌谷

自分の調査先の人と勉強会をやつて、地球研の経費でおっきな絵図を、すごいいい精度でスキャンしてもらつて、江戸時代の絵図や明治時代のををみんなで見えて、どう変わつていったかというのを、地元の人とその絵図を見ながら自由に語るっていうのをするんですけども。

關野

うちのやつていることと一緒にですね。まさに小寺さんがやるのと。

渡辺

それGISに起こしましょうか。

鎌谷

やってもらえますか。

小寺

GISに乗せるという意味合いは、単なる地図じゃなくて、シンプルな地図も重要ですけど、プラス、いろんな見方を変えたりとか、色をつけたりとか、ワツと可能性が広がって。

鎌谷

絵図を見るのは、久しぶりに見るんですけど、それ以外は、ずっと江戸時代から現在まで、庄屋さんと区長さんが書き続けてる日記を、毎月1回みんな德音読するというのがやってるんです。音読してたら、今、大正時代読んでるんですけど、この道を作るようになったとか、小学校歩いて行っているときに、雪がすごかったから休みになったという話があつて、そしたら80代90代の人が、そういや自分が4月に入学式行ったときにまだ雪があつたとかいう話をして、それを明治時代の地図とか見せて、どの道ですかみたいな感じの話をしながら、それを書き起こしていくという作業をしているんですけども。そこに入って11年目になつて、4年前からは、家も借りて、月何回か住んでるんですけど、家を借りてることを日本史研究者に話すと、「何が終点なのか。どこまでできるのか」っていうのをすごく聞かれたんですけど、あまり終点を考えずに、ずっと行き続けてきたら、そのたびに、いろいろわかつてくることがあつて、それを上書き保存していつてるような感じがするんです。このの地域を見ていつてよかったなと、今、振り返って思うんですけど、最初スタートのときはもつと大きな町単位で見たらいいのかとか、いろいろ考えて、試行錯誤してたときがあつたんですけども、やつ

\*9  
「村の日記」研究会。なお研究会の成果物として活動内容を記した『暮らしと歴史のまなび方―知内「村の日記」からの出発―』（二〇一〇年）がある。



小寺

ていく中で見えていくものに、素直に従っていくっていう迷いの部分も、地元の人たちに見てもらってる部分があつて、私たちは、私たちの研究会<sup>\*9</sup>では。こうやと思うけど、でも、地元ではそういうことはせえへんとかいろいろを聞きながら、その研究の在り方も、地元の人としゃべっていく中で、どんどん変わっていくっていうことも研究なんだなっていうか、研究がどう変わっていくかっていうことを、いつ自分がどういうことを言われたときに、こういう考え方もあるっていうことがわかったっていうふうな、曲がり角を記録していくことが研究なるっていうか、そういうこともちよつと考えたりもします。

僕ら、そういうこと作業するための装置を作りたい。装置というか、道具というか、仕組みというか、作りたいな。僕らのプロジェクトは、ステークホルダーミーティングがあつて、同じような、ああでもないこうでもない、終わりっていうの多分ないです。だから、終着点とか何か言うてましたけど、そうじゃないと思う。そういう作業っていうのは、終着点を見つけていうんじゃないって、始発がどこなのかっていうの、それを改めて探す。実は、出発地点間違つてたりしたら、正しい出発地点見つかるっていう、そういう作業かなと。

絵図持つて相談させてもらいます。よろしくお願いします。

鎌谷

## エリアケイパビリティーアプローチ

三村

石川先生にエリアケイパビリティーで見えますっていうふうに言って、何ができるか質問したら、何もできないんじゃないって言われて。それでずっと悩んで、なかなか難しいかなと思ってた。昨日渡辺さんと風呂の中で、エリアケイパビリティーの話をずっとしてて。そのときの話が、エリアケイパビリティーは、アプローチだって渡辺さんが言ったんです。今回ここで話し合った研究者のかかわりとか、エリアや愛情とか。地元に入って活動することがある種のケイパビリティーを向上させる仕組みである一方で、それをやってしまうとエリアケイパビリティーを下げてしまう可能性がある。今回は、こうしたアプローチをいろいろと話し合ってたというのが成果なのかなと思ってるんですね。問題点と可能性というのを、ここで議論できたというのが、この座談会の大きい成果かなというふうに感じております。

渡辺

実は今こうやって議論して、エリアケイパビリティーっていう言葉がなかったら、出てこないような、意見とか考え方とかがある。それは、エリアケイパビリティーアプローチなんです、それこそが。エリアケイパビリティーという言葉がなかったら言えないようなプロセスをこうやって一つ一つ積んでいくっていうこと自体が、エリアケイパビリティーアプローチでいいんじゃないか。

三村

具体的な事例を通したエリアケイパビリティーの例があると、確認しやすくなる。

それと、エリアの概念整理を今後やっていかなきゃいけない。誰もがそれを使えるような仕組みになつていく、そういうことなのかなと。

王

渡辺

でもちよつとだけ、これ、エリアケイパビリティーについて話し合うことが、エリアケイパビリティーアップローチなんだよと言うと、ちよつとずるくないですか。

王

渡辺

いや、いいんです、今の段階は。だつて育てる自体がアップローチなので。うまくまとめた感じで、すぐまとめたなと思ったので、つつい。

三村

だから、端的に言いたいのは、育ててください。みんな、たたいでもんで、引きのばしてやってくださいということなんで。

以上です。ありがとうございます。

あとがき 「地球研のためになることをしなさい。」

きっかけは、わたしが所属するプロジェクトリーダーの村松さんの一言。当時のわたしは、地球研での勤務が2年目に入り、所内で募集される所長裁量経費について村松さんに相談を持ちかけた。村松さんは、研究に関する経費はプロジェクト予算から捻出するので、それ以外の内容で申請しなさいと。「地球研のため」と言われても、地球研内で親しい知り合いは、同じプロジェクトのメンバーを除けば数えるほどしかいない、というかほとんどいない。唯一、喫煙仲間の清水さんが相談を受けてくれた。それなら、地球研の研究員を集めておもしろいことやろう！

わたしたちは、「地球研若手研究員連携プロジェクト」と命名し、メンバーを募った。目的は、地球研内の希薄な関係（わたし個人の責任でもあるが）を改善して、勉強会やフィールド合宿を通して、研究員の専門や興味など知見を共有することで新たな研究の発掘を行う。このプロジェクトは、研究にとって忘れがちな「豊かな発想につながる視野」を広げる訓練の場として、新たな発想を生む場として効果的であることを期待している。この結果は、もう少し先のことであろう。

このプロジェクトには2つのメリットがあると思われる。ひとつは、個人研究にとってメリットがあること。わたしたちは、「地球環境学に資する研究」という枠組みの中で、さまざまなフィールドで研究を行っている。その知見を共有する

ことは、異なる考えやもしくは異なる視点を共有することができ、個人研究へのフィードバックが見込まれる。もうひとつは、横断的研究分野の実践的な訓練としてメリットがあること。このプロジェクトは、問題発掘や研究テーマの発掘のために萌芽研究を学際的 (interdisciplinary) に探ることに意味がある。わたしたちは、定期的に勉強会を実施して、自由な枠組みのなかで分野横断的研究の可能性について議論を行ってきた。もちろん、手探りの段階で整理できていない部分も多いが、こうした試みから枠組みを飛び越えるきっかけがつかめると思われる。

さて、わたしたちが訪れた岐阜県的美殿町・金華山は、關野さんの地元である。座談会でも述べられていたように、「面白いことを始めている人たち」に会って話を聞く。つまり、地域資源を発掘し、地域資源を活用する優れた実践者たちに会いに行き、その取り組みについて勉強させてもらった。2日間と短い期間であったが、研究員が同じものを見て、聞いて、食べて、その結果、互いの考えを議論して、新たな発見を摸索した。また、寝食をともにすることで、互いの距離が縮められ、本音を語り合える機会でもあった。他方で、地球研プロジェクトの手法を用いて、他のプロジェクトメンバーが共同で取り組むのは地球研で初めての試みである。今回の視察では、地球研プロジェクト「東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティーの向上」(代表 石川智士) で研究が進められている「エリアケイパビリティー」を用いて、その言葉に含まれる意味や意義、課題について検討した。このような取り組みは、村松さんが言う「地球研のため」として、ひ

とつの成果として貢献できたのではないかと思っている。

本書は、少し読みにくいものになっているかもしれない。しかし、右往左往と模索しながら共に考え、わたしたちの記録でもあり、本書の読み手はわたしたちなのである。10年後か、20年後、この企画に参加したメンバーが、新たな研究を行う仲間として、共に歩むことができることを楽しみにしている。

本プロジェクトを進める際に、今回の視察には参加できなかったアミさん、内山さん、遠藤さん、熊澤さん、橋本さん、安富さんたちには、企画段階での目的や方向性などの助言を頂いた。また、本書は、平成26年度所長裁量経費（若手研究者支援経費）の研究助成を受けて実施された。安成所長をはじめとした、たくさんのプロジェクトリーダーの方々には、温かく見守っていただき、感謝したい。最後に、山川醸造株式会社の山川さん、山本佐太郎商店の山本さん、たい焼き屋福丸の森さん、岐阜市歴史博物館のボランティアの方々、末筆ながら心から御礼を申し上げます。

2015年3月

三村 豊



# 話し手の紹介

## 1 研：砂漠化をめぐる風と人と土プロジェクト（代表 田中剛）

清水貴夫：文化人類学（アフリカ地域研究、都市研究、子ども研究）

調査フィールドはブルキナファソ、セネガル、ニジェールなど、西アフリカが中心。これまでストリート空間の子ども、若年者、それを取り巻く NGO 活動などが研究対象であったが、近年、西アフリカにおけるクルアーン教育に着目。イスラーム的教育のフォーマル化や、インフォーマルなイスラーム教育から垣間見える近代と人びとの実生活の間の宗教 - 近代の軋轢を批判的に検討している。

手代木功基：地理学

主にナミビアやモンゴルなどの乾燥地で、植生分布と放牧などの植生利用の関係性を明らかにすることを目指している。また、国内でも山間地域の巨木の立地環境に関する調査を行っている。

## 2 研：高分解能古気候学と歴史・考古学の連携による気候変動に強い社会システムの探索（代表 中塚武）

鎌谷かおる：歴史学（日本近世史）

日本近世・近代の内水面漁業史および地域社会史の研究をしている。  
また、滋賀県をフィールドに、近世～現代までの「村」の総合的研究を歴史学・民俗学・社会学の仲間と共同研究をしている。

佐野雅規：古気候学

樹木の年輪から環境の変化を読み取る研究に従事する。主に東南アジアやヒマラヤなどのモンスーン地域を対象とし、人里離れた手つかずの森林から老齢木のサンプルを集めてきて、その年輪の厚さや材密度、同位体比を測ることで気温や降水量がどのように変化してきたのかを調べてきた。最近では、日本の気候の変化を過去数千年間にわたって詳らかにし、その当時の人々が気候変動に対してどのように応答したのかを歴史・考古学者と協同して解明するため、お寺などの古い建物に使われていた木材や、遺跡から出てきた木材を使って研究を進めている。

## 4 研：統合的水資源管理のための「水上の知」を設える（代表 窪田順平）

小寺昭彦：農業環境情報学

地球研では衛星画像を用いて土地利用の長期変化や季節変化を解析しています。もともとは作物栽培で、ベトナムの水田でお米の栽培試験をしたりしていたのですが、もっと広い地域で見たいという思いから、リモセンという道具を活用するようになりました。気になるものを普段とは異なる視点から見つめなおすことができるのが、リモセンの魅力だと思っています。

關野伸之（案内人）：環境社会学

岐阜県職員として 10 年勤務後、一念発起して国際協力を目指すも研究者の途を模索中。  
アフリカ地域研究で学位を取得するも、調査地のセネガルに疲れてしまい、バリ島のスバック調査に没頭する日々。  
趣味は野鳥観察と猫。部屋に勝手に住み着いた野良猫のチャン吉と同棲中。

## 6 研：東南アジア沿岸域におけるエリアケイバビリティーの向上（代表 石川智士）

渡辺一生：地域研究

四日市大学環境情報学部、信州大学大学院農学研究科を経て、2008 年に岐阜大学大学院連合農学研究科において博士（農学）を取得。2008 年より、京都大学東南アジア研究所に研究員として勤務し、2013 年からは総合地球環境学研究所にて「東南アジア沿岸域におけるエリアケイバビリティーの向上」プロジェクトの研究員として、沿岸域における住民主体の資源管理のあり方について調査、研究を進めるとともに、エリアケイバビリティーという新しい概念の構築と発信を行っている。

## 7 研：メガシティが地球環境に及ぼすインパクト—そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案（代表 村松伸）

三村豊：建築史・都市史

建築・都市史を中心に画像処理や GIS を用いて研究に従事する。主にインドネシア・ジャカルタ都市圏を対象に、時系列の都市の情報基盤構築を行う。ジャカルタ都市圏は、都市（コタ:kota）でもありかつ村落（デサ:desa）であるような地域（Desakota）が広域都市圏を形成しており、そうした都市構造が環境への負荷を軽減している可能性がある。都市中の「隠された智恵」を古地図や地理情報をもとに明らかにする研究を行っている。

## 1 1 研：アジア環太平洋地域の人間環境安全保障—水・エネルギー・食料連環（代表 谷口真仁）

王智弘：資源論

世界遺産の森で知られる鹿児島県の屋久島や温泉都市として発展してきた大分県の別府など、資源利用の持続可能性がその将来を左右する地域社会をフィールドに、資源開発史を調査。環境と開発をめぐる問題を、資源開発で生まれる便益や負担の分配の、社会階層間に現れる偏りの問題として捉え、問題の構造ができあがっていく歴史的な過程を導入される技術・制度やアイデアの組み合わせ、編成される人と人との関係の変化に注目しています。



後列 佐野雅規 手代木功基 清水貴夫 小寺昭彦 関野伸之 王智弘  
前列 鎌谷かおる 渡辺一生 山川さん 三村豊

フィールドぶらり 1 「岐阜」  
自転車でめぐる・みんなで考える  
—長良川河畔のエリアケイバビリティ—

2015年3月発行

編者 地球研若手研究員連携プロジェクト編

発行者 総合地球環境学研究所

編集 三村豊

印刷所 関田中プリント

ISBN 978-4-906888-12-2